



鳥インフルエンザの感染経路と対策

～渡り鳥に注意

各地で鳥インフルエンザの発生が相次ぐ非常事態となっている。なぜこのようなことが起きたのか。前触れは野鳥の感染報告であった。鳥取や鹿児島などで見つかったコハクチョウとナベヅルはともに野鳥（渡り鳥）であり、渡りの途中で感染していた可能性がある。しかも検出されたウイルスの株は非常に似ているという。今回は渡り鳥の生態とウイルスを持ち込む可能性、またその対処方法についてまとめた。

●渡り鳥の生態

例えばナベヅルはシベリアで繁殖し、食物が少ない冬に南へ渡る。最近の生態調査ではシベリアから日本へ海を超え一直線に渡るのではなく、中国大陸、朝鮮半島を経ること、できるだけ陸を通過して夜間は休みながら、20～40日をかけてゆっくり移動することがわかっている。ナベヅルにとって最も近い日本は、朝鮮半島に近い中国地方や九州地方である。飛来は10月中旬から1月中旬まで続き、3月上旬頃には再び帰って行く。飛来羽数は昭和15年頃をピークに減少を続けている。飛来した当初は大変疲労しており、環境も違うので強いストレスを感じている。

コハクチョウも、おおむね同じような生態だが、越冬地はナベヅルよりずっと広い地域になる。ポイントは、中国大陸や朝鮮半島にゆっくり滞在しながら飛来するという点である。

●今年はなぜ渡り鳥からの発見が相次いでいるのか

社会が過敏に反応しているだけ、という考え方は危険である。渡り鳥のモニタリングは毎年大規模に行われており、今年のように発見が相次ぐのは、大きな感染源があると考えたほうがよい。

韓国では昨年末以来、鶏とカモでの発生が数十件に拡大し、数百万羽の殺処分が行われている。中国の状況は明らかではないが、人への感染報告があり、発生している可能性が高い。これらの地域から渡り鳥がウイルスを持ち込む可能性は高いと考える。

もともと水鳥はA型を含むさまざまなインフルエンザウイルスを自然に腸内に持っている自然宿主である。日本は養鶏業が集約・点在していて感染しにくい、有力な感染原因と考えられる。

ウイルスはごくわずかな糞からでも感染するが、インフルエンザウイルスに有効な消毒剤は多く、一般的な消毒剤（逆性石鹼やアルコール、アルデヒド剤やオルソ剤など）はすべて有効である。これはウイルスの病原性の強弱や型を問わない。

●インフルエンザウイルスへの有効な対策

見えないウイルスへの対処として、関係者すべてが以下の点を心がけたい。

①湖や沼に近寄らず野鳥の糞などに触れない、②外出後は靴底や車のフロアマットも消毒を徹底する、③手指の洗浄消毒を常に徹底する。

さらに農場においては①鶏舎出入口を開け放しにしない、②外に食べ残しの餌などを置かない、③鶏舎や防鳥ネットの破損を修理し野鳥やネズミの侵入を防ぐ、④部外者の農場立ち入りを制限する、⑤鶏舎内用衣服・靴の専用化を徹底する、⑥鶏舎内外の消毒回数を増やす、⑦水道水以外を飲用に使用する場合、塩素消毒する。つまりは徹底した消毒、着替え、履き替えに加え、防鳥ネットの設置に尽きるのである。

防鳥ネットについて、国は家畜畜産物衛生指導協会の冊子で網目2cmを推奨している。これは小鳥に有効な農業資材として製品化されている。可能なかぎり導入が望まれるが、網目の大きさはとにかく破れや不備をなくすることが重要である。すきまからいったん鳥が入ると、今度はネットのせいで鳥が逃げられなくなり逆効果となる。

まず水鳥対策を意識して徹底したい。そして水鳥のウイルスをスズメやネズミ、虫が運ぶ可能性も考え、日本全国を重点地域と捉え、農場だけではなく関係者全員で発生を最小限に食い止め、全力で日本の養鶏を守っていききたい。

渡り鳥のルート

